

ある現場教師の記録

——夏季休暇を中心として——

はじめのことは

その(一) (ホーム・ルームにて)

「明日から君達は高校最後の夏休みに入る。全国の同級生もこのチャンスを見逃さないであろう。休暇中の課外授業と、各自の学習計画とを徹底させるべく、一生の思い出になるほどの努力を継続して頂きたい。質問がなければこれで終る。明日からも元気でやって来い。」昭和三十七年七月二十日金曜日第四限、三年六組のロング・ホーム・ルームは、私のこの言葉で終った。本日授業二時限、その後、例によって清掃。全校集会。そして、今ホーム・ルームを済ました直後のまとめだ。明日から課外だ。そうだ明日からやるのだ。昨日の評価を頭の片隅に置いて。笑いと苦しみ、希望と不安とを絶えず脳裡にちらつかせながら。人は一喜一憂する小人と見るかもしれない。しかし現場の私達はそれを知っているながら、これでよいのだ。

須賀良夫

と思う。「この命、何をあくせく明日をのみ思ひ患ふ。」ふと詩の一節が皮肉に浮んで来るのを苦笑しつつ、「六十年の伝統を誇る」老朽校舎の階段を、がたびし鳴らして部屋に帰った。

その(二) (進学指導室にて)

本館の一隅の小さな城。あえて城という。その内部には、現在十一名の同志がいる。三年主任を主体とし、主事、そして紅一点とも言うべき女子事務職員。(彼女は、プリント、調査統計の名手であり、進学資料の生き字引的存在だ。)この部屋には、進学・就職に関する数年間の貴重なデータが整然と配列保管され、壁という壁は模試成績、入試合否、大学受験難易表などで武装されている。最も手近かな所にあつて、いつも私達を見下しているのは、県下一斉模試各校別得点段階表である。私達は、他に旺文社・全国・西日本など数種の模試成績資料を持っている。その過去の資料も。けれども、最も注目しているのは、旺文社と県下一斉模試である。受験の

度に祈るような、そらだ、「祈念」という言葉を幾度味わったことだろう。そして、成績発表通知が来ると、期せずして皆集まり、ある時は悲観、ある時は楽観、ある時は一種の諦観、これを何度繰り返したことであろう。今、一学期も過ぎて、夏の強い日射しを浴びて日毎に黄色味を増していくこれらの資料を仰ぎ、私は私なりに現在における生き甲斐を感じる。そこに、入学当日から今日まで、彼等と共に歩いた長い道程を見る。そして彼等の現在を見る。又彼等の来年三月、いや二月における苦闘と感激を見る。大学入試制度に関する論争は、絶えず行なわれ、私達は、常に批判し訴えてきた。けれども、今の私は理想は理想であり、現実には現実と考えざるをえない。理想は捨てないが、現実を直視せねばならぬ。なぜなら改善さるべき雰囲気はあっても、実現されざる社会へ、今は教え子を送り込まねばならぬからである。理想への努力は続けていこう。けれども、私の現実への傾斜を示す針は、かつてないほど、鋭敏に現実と接触しようとしている。緊張する時には、この部屋は一種異様な雰囲気をかかすが、いつもはそうではない。そんな「いとすさまじき」状態が続いては、こっちもたまらぬ。そこで、必然的にカタルシスが行なわれる。スポーツ・ユーモア・洒落・さてはXがYがということに落ちてしまう。今のところ、私と、同窓のM君が、たまたま文科であるが故に、そのXかYかの名コンビにさせられている。(広島島の恩師よ、嘆き給ふこと勿れ。師の道を尊びて此処に至る。将に出監の誉を得んとす。) 大杯を挙げて高談うたた清き時もある。紅一点(教え子であるが)は、常に美粧を凝らして花を飾り、紅緑いずれの茶をもたて、即席ラーメンを仕出し、美化清掃につとめ、ある時は、嬌として宴に侍し「たをやめぶり」を見せる。重い

負担は分ち合い、和氣溢れる部屋である。職員室からやって来る同僚を歓待し、釣の極意や生徒その他のニュースを得たりもする。この部屋では、アイデアを尊重する。気軽に相談して、良いと思われることは、すぐ実行に移すのである。さて私の直接の仲間には三人いる。四組・五組・七組の主任で、共に進学で一年から一緒である。教科は、例のM君の社会、数、英と私の国語である。年令は、大体三十台で、数学だけが二十九才で最も若く、私はその上である。あまり差がないことは、この場合プラスであると思う。この四人は、授業も互いのクラスに行くので、いつも連絡し合う。先程も、ある生徒について、昨年のように、現役で東大に入れるかどうかを話し合ったが、大体法文なら見込みありという線に落ち着いた。今は机を並べて、明日からの課外の予習やプリントに余念がない。

まえばきはこれぐらいにして、本論にはいりたいと思うが、その本論とは、結局私がこの夏休みをいかに過したか、というきわめて平凡な実践記録である。休暇は合計四十二日間あったので、煩雑になるのを避けて左の五項目にしぼる。それも概況に止まるものでしかないが、私としては、現場の雰囲気と実情の一端とを述べて、何らかの参考に供することができれば、全く望外の幸いであらう。

一、課外(補習)授業の実態

(一)各学年課外実施計画表とその概況

(二)私の課外実施計画表とその概況

(1)前期課外の概況と反省

(2)後期課外の概況と反省

二、休暇中の登校ということ

三、自宅研修の実態

四、三年校内模試についての所感

五、家庭訪問の印象

(一)橋上の追憶

(二)ある母とアイスキャンデー

(三)家庭と生徒

一 課外(補習)授業の実態

(一)各学年課外実施計画表とその概況

学年	一日の時間数	延日数	延時間数	実施科目
1	4	17	68	英教国化社
2	6	20	120	英教国化日
3	6	27	162	英教国生化 物日世人社

最初に右の表について、昨年度と比較して主な問題の箇所を概説を加えたい。

(1)一年

これは、日数、時間ともに大体昨年どおり。ただ科目については、昨年は英教国、いわゆる基礎教科が中心であったが、今年には化・社を入れた。理由に化社の進捗調整による。

(2)二年

日数には変動がなかったが、時間数は一日二時間を増加した。この学年は、入学当初から、弱いとされていたので補強したわけである。日・化は、本校では社会科では日本史を、理科では化学を主体として教育課程を組んでいるので、これによった。

(3)三年

時間数は変更なし。日数は五日増加した。これは、一学期の第一回県下一斉模試において、県下で八位あたりであり、伸び悩んでいたことと、昨年度の生徒に比較して、レベルが落ちていたためである。この日数は、本校の最高記録となったが、県下の他校は大体これと同じ。二三校三十日やった由。この増加は、教師・生徒共に大きな負担となったが、結局やって良かった。すなわち、第二回の県下一斉模試と旺文社模試は、それぞれ九月初中旬に行なわれたが、かなりの成果を見たからである。県下一斉の方では、昨年度の同回の四位には及ばなかったが、総点〇〇点で〇〇点以上(九大以上)の人数からみて県下五位、旺文社では、N君が英教国で全国四位を得、他の者も大分伸びてきたのである。地方校としては、やや良好と思える成績である。さて、基礎教科以外の、理社各教科は、進捗が遅れている模様なので、時間数も相当増加している。受講要領は普通やっているとおり、国公立系は、基礎教科と、理社ともに二科目ずつ、私立文系は、英国と社の一科目とを選択させている。

(二)私の課外実施計画表とその概況

前後の区別	担当学年	コース別	一日の授業時	日数	授業時小計	授業時合計
前期	1	商1・進2	3	8	24	94
後期	3	進5	5	14	70	

(1)前期課外の概況と反省 (二年)

正直に言って授業がやりにくかった。名前と顔が一致しないこと

るか、そのどちらも知らないのが大部分である。国語科の内部事情もあって、初めて顔を出した次第である。特にできる良いのと悪いのと両極端を若干覚えたに過ぎない。八日間、何か空虚な授業をやってしまった。商業専修コースでは、就職受験用として、諺・故事熟語を講義したが、能力差がひどくて困った。復習に重点を置いても時間をとられるし、最後になるほど急ピッチで、結局詰め込み授業に終り、評価もできず、惨めな授業であった。テキストは副読本。

進学コースでは二クラスとも文語文法「用言の用法」の部分を済ます予定であった。済むことは済んだけれども、用言の基礎がさっぱりであった、絶えず引きもどされ、実質的には用言の総復習に終始した。女子も相当きびしく教えたので、五日目頃からようやく軌道に乗り、ピッチもあがり、楽しくなるところで幕が降りた。テキストは、土井忠生先生（広島大）の「文語文法」。両コースとも、課外終了後、普通授業担当教師と、後期課外担当教師とに、進捗と、学習状況とを報告しておいた。

(2)後期課外の概況とその反省（三年）

テキストは、受験問題集「清水書院」刊「大学受験国語問題集」古文編である。これは平日の課外用テキストでもある。授業対象は、国公立系生徒である。一時間に一問題で、先を急ぐことなく、この際、忘れていた基礎（文法と単語・文学史）を想起させることを主眼とし、最初にそれを押さえて後、内容にはいった。進度がゆっくりしていたので、生徒はよくついて来て、予習もやっていただけども、一寸高度な内容の問題では、優劣の差をはっきり見せ

た。三年のこの頃になって見えるこの差は、一寸手のほどしようもないものである。結局は読解力の不足であるが、他の教科ではベスト十にはいるものでも、そして基礎は一応マスターしている者でもこの現象は起こりうる。県下一斉模試でも五〇点はきつと取るが、七〇点以上は絶対望めないのである。私は、できるだけわかりやすく内容分析をやったが、さらにその奥にちら／＼するヒント、あるいは直観かもしれないものを、そのような生徒に与えてやり、納得させることは、現在の私には不可能と思われる問題に二三ぶつかった。これだけの解説とヒントを与えて、なお理解できない時は一体どうすればよいのか。センスがないのだと言えばそれだけである。これでは指導にならない。教師の生活を始めて十年の私は、じつと自分の非才なることを悔むのである。これに反したこともある。できないだろうと思った問題を、ほんの一寸のヒントですぐに解いてしまう生徒がいる時である。その時は、ただ有難いと思う。よくここまで成長してくれたと思う。そんな生徒は結論的に言えば素質もあるのだろうが、一度習った事は裏に確実に覚え、そして理解している。更によいことには、多くの読書生活と書く生活を重ねているのである。断片的な知識ではなく、一朝一夕にはできない、巨大な地下茎を有しているのである。現代の学生のほとんど共通の欠点は、右の努力の不足からきているのであって、それがこのよ／＼な読解力の不足を招来していると思う。これを除去する方法は、まず文学に親しみ、読書や創作をやるうとする意欲を生徒に持たせるべく、指導し、援助せねばならない。これはまた大変な仕事である。しかし、私達はやらねばならない。たとえば三十八年度からの新教育課程では、作文がかなりの比重を持つてくる。この場合「書かせる」でなく、生徒が「書く」のでなくてはならない。しかる

に、世には何と「誓かせる」ことの多いことよ。この作文なるものが、導入から評論・反省に至るまで、いかに教師を悩ませるものであるか、私は予想できるような気がする。大分横道にそれた様なのでまたもとへ帰る。三年の課外では右の講座のほかに、私立文系を対象にした授業をやった。テキストは「右文堂」の「現代文問題集」。卒直に言つて、古文より更に多くの問題を含むものである。私達は大学の先生方に直接教えを請う機会がない。だから、たとえば現代文の内容要約にしても、こんな時には、どの程度の解答を要求されるのだろうか、気がかりになる場合が多い。授業でやれば、表情や、態度、前後のいきさつから、理解できたか、できないかは見当がつく。したし書きことばで表現された時、当然定着され、限定される。これは表現力のあらわれであると言われれば、仕方ないことであるかもしれないが、厳密な意味での「完全な要約」などできない文章があるのではないか。まして、長文を字数に制限を加えて要約させる場合、本文中でまともなまっぴりければ良いが、ばらばらに散在していれば、どうしても抜ける部分ができやすい。問題集の解答例にも、どう見ても納得いきかねるのが見える。何も解答どおりに考える必要なく、大体のポイントを押えていればよいなど思つたりするが、ここでもまた、その大体なるものがどの程度ならば完全な得点を得、どの程度ならば失点になるのか。

二 休暇中の登校とじいじ (七口)

これは一寸奇異なテーマであるが、要するに、休暇中、何も特に定められた仕事があるわけでもないが、担当クラス生徒が出校して

いる日に出て来て、尿休み、放課後など個人面接をやり、進路・身体状況・生活状況・学習状況などを調査したりすることである。また、教科の予習・進学会議・文書の受理などした日が、数えてみたら七日あった。一、二年の頃よりも、登校の必要度が増してくることもまた止むをえぬことである。

三 自宅研修の実態 (十日)

いわゆる休暇である。本当のところ、公務員である私達には、「休暇」ではない。日曜日だけである。従つて「休暇」でないならば、何か仕事をせねばならない。そこで便利な言葉がこの「自宅研修」である。ところがこれにも、計画表とその結果の報告書が必要である。私は毎年のことなので慣れてはいるが、とりあえず「昭和三十七年大学入試国語問題の研究」のテーマを出しておいた。しかるに実際には少しもできなかった。十日足らずの完全な家居を幸いとばかりに、家事に忙殺されてしまったのである。いわく益。いわく家族リクレーション。いわく長男の家庭教師と兼助手。いわく大掃除等々。加えて生徒が来る。父兄達も来訪される。朝早いことから、夜遅いまで多種多様で、完全にベースをこわされて、結局、形式的な一片の報告書を出して勘弁してもらつた。

四 三年校内模試についての所感

三年は、大体毎月一回、何らかの形において模試をやるように、進学年間計画に組まれている。多い月には二回ある。もちろん、

定期の中間・期末考査もあって、その間隙を縫うように織り込まれているのである。ところが、八月には最初は入れられてなかった。

休暇前の進学会議でその必要性を確認したわけであるが、その目的は三つほどあった。当然のことながら、生徒は試験をすると言えば良く勉強する。つまり、休暇中も絶えず模試を鼻先にぶら下げて刺戟するわけである。これがまず一つ。次は、前期の課外に若干サポル者が居たが、これに対する意味もある課外授業の評価。第三に、生徒の家庭学習の打診。田舎の子供は香気で、いつも勉強は受身の型でやるらしい。自発的にやっているなど思っていると、いつのまにか受身の型を愛用している。ところで私達はまずまず心配なので、一層また強く引く。引かれるから受身になる。私達は、ずっと以前からこの悪い風習を一掃しようとしたが、やはり堂々めぐりを繰り返しているのである。三年の夏休みには、いくら何でもやるだろうというわけで、家庭学習の打診を試みたのである。さて後期の課外は八月十五日から開始されたが、各教科とも一言に問題の作製にとりかかった。国語は漢文を除いた全分野、古文(若干漢文を含む)現代文・文学史・韻文を私が出題した。少しやさしすぎた部分もあって、最高九十八点が出てしまった。もう十点分むずかしいのを入れるべきだったかとも思ったが、今度のねらいは、基礎力の充実にあったのと、九月の第二回県下一斉模試に自信らしいものをつけさせる意味もあってやったことなので、これで良いのかもしれないと思ったりもした。今度のテストで特に目立った進歩は、記述式答案が上手になってきたことである。これは嬉しいことである。それにしても、九月の模試が気にかかってくる。そのテストで上昇カーブを出さねば、大体年度末まであまり芳しくないのが通例である。今度

のテストの答案は、課外の時間に返して問題点を指摘する。採点について、二三の生徒の質問があり、訂正してやったり、却下したりして処理を済ませた。今度もまた進学会議を開いて、各種の資料を比較検討して、おおむね良好の結論を得たが、基礎教科に比較して、やはりまだ社会・理科の伸びが鈍いようだという点が問題になった。スタートが少し遅れているのである。(この傾向はとうとう九月の県下一斉模試まで尾を引いてしまった。)これは、教師の責任というよりもむしろ生徒の自覚が不足なのだ。昨年度は丁度反対の現象を見せていた。すなわち、昨年の生徒は理・社の力は清爽にのびて、むしろ英数国の方が劣っているのではないかと見られていたのである。今の三年は、理社は二学期からでもという意識を持ったものがなかったにせよ、とに角真剣に理社にとり組んでいなかったのである。基礎教科で伸びなやんでいる者は、現段階においては、特に理社で得点を増すようにすべきである。今度の成績一覽表を渡す時に、生徒にはこの点を特に強調しておいた。

五 家庭訪問の印象 (三日)

休暇にはいる前からの懸案であったが、前期課外の出席率の悪い生徒の件・進路決定・学習・生活指導などで、どうしてもやろうというところで、前期課外終了後一言に実施した。実施要領は、進学四クラスを解体し、各方面地域別に分けて、主任を中心として、他に副主任など加え、計六名で分担した。大体生徒三十二名程度の割当てになる。さて、私達主任は、特に三年主任に決った時から、ホーム・ルームのセクシヨナリズムを拂して、クラスを解体した広い視野

に立つての進学指導をやらうと申し合わせていたのである。事実これまで、クラスを超越して、時・所をかまわず指導を加え、その結果は必ず主任に連絡していたのである。その結果、今まであまり主任の目が届かなかった点まで、指導ができるようになったことはいうまでもないが、進学指導の面のみでなく、生徒の生活態度も目立って向上してきたのである。現在の三年は、今年にはいつてから、まだ一回も指導委員会の世話になっていないのも、案外そんな所に原因があるのかもしれない。さてそのような次第で、今度の家庭訪問もこの行き方に準拠したものであった。さらに六人の分配は、各人の地域的なつながりの度合い、自宅からのコースや距離、単車の有無などが考慮に入れられていた。私の場合は、最も遠い地域に属するA町一帯と、そこに到る途中のN村がその担当で、該当生徒は三十二名である。私は、A町の出身で、地理的条件にも詳しいし、また家庭とも親しみやすい点に加えて、二泊三日の拠点ともなるべき実家がある中央にあるので都合がよかった。このA町は、東西十五キロ以上、南北約八キロ、大きな谷間だけでも三つ、小さいのは数え切れない程あり、合併する以前は、五ヶ町村に分かれていたもので、経済的にも、比較的恵まれていて人口も多い方である。中央を流れているA川は、この流域の命の泉と呼ばれ、水量が割合に豊富で清冽なこの流れを、私は少年の頃から、かぎりなく愛したものである。しかるに、昨年十月二十五・六日、西日本を襲った集中豪雨は、県下でも最も多量の雨を、この小さな国東半島に振りまいたのである。放射状の谷という谷から、一時に濁水が湧いて、滝の様にA川に注ぎ、あの美しい流域は、一時間あまりで未曾有の被害を出した。死者二十数名、物質的な損害は、全く言語に絶した。生きて

いたら当然訪問する地域に住んでいた、色白の、温厚なそしてよく勉強していた女生徒M君も、あの日下校の途中で水没してしまつた。今度行けば、暗い過去の傷跡と、新しい建設の息吹とに、私はきつと複雑な印象を受けるだろう。進学できなくなったと泣いていた女生徒と母親、月謝を払うのが今も苦しい家庭、訪問を明日にひかえて、コースや、資料の整備を終えて寝床にはいった私は、去来する想念にとりつかれて、なかなか寝つかれなかつた。明くれば八月十五日朝、晴天。今日から約七十キロの道程を走るわけである。妻がA町方面の道路の悪いことを心配する声を背後に出発する。エンジンには快調である。昨日の午後、モーターに寄り、オイル交換、その他の点検をしてもらっている。田舎で故障を起こすことはとて惨めなことではない。どうか、そんなことのないようにと思ふ。市内を抜ければ悪路に変わる。平均二十五キロぐらいで、注意して走る。

(一) 橋上の追憶

川口に近いこの橋はコンクリート造りである。私は車をとめて黙とうをした。昨年、水害の翌日、現地調査隊として十名ほどの同僚とやって来たときに目撃した惨状は、全く筆舌に尽しがたい。中学時代の友人が、兄と二人で山積した流木などをかきわけて、兄嫁と甥、姪などの遺体を、悲痛な面持で捜していたところである。登校していた生徒だけを残して、家は流失、一家全滅の悲劇が演じられたのもこの付近である。その生徒は、今は大勢の人々に助けられながら、元気で通学している。当時私のクラスでは、生徒、家族共に

別状はなかったが、家屋や田畑の被害甚大であった者は三名いた。この流域の人々は、ほとんど、何らかの形で暗いものを持っているのだ。毎日ブルドーザーのうなりを耳にしながら。

(二)ある母とアイスキャンデー

A町の最も山奥のある家庭を訪問した時のことである。はるか下の道路に車を置いて、急傾斜の細道を、汗をふきながら登って案内を請うたが、出て来たのは、かなり年老いた母である。弟妹は不在、生徒は、学校のある市の下宿で勉強中で帰省してはいないという。父の方は、下の川原で付近の子供の水泳監視当番に出ている。私はただ水だけを頂きたい。何もかまわなくてよい旨を言ったが、「折角遠方に来て下さったのに。」など言い、「すぐ帰りますから。」と言って私がとめるのもきかずに、とうとうかけ下りて行ってしまった。私は所在がないので、庭先に立って周囲の景色を眺めていた。此処へ来る時、高く見えた山がふと見ると、この庭先に立つ自分とあまり違わない状態になっているのに気づいてびっくりした。すばらしい眺望で遙か東方に豊後水道が光っていた。およそ二十分ぐらいいも待ったであろうか。母は、菓子若干とアイスキャンデーを買って小走りに帰って来た。父もそのあとから帰って来た。私は、母がどこまで行ってくれたのか、大体見当がついた。来る途中に店があったが、そこから車でも大分遠く感じられた。多分ほとんど走りつづけたのであろう。汗びっしょりになっていた。早速、紙袋から取り出してくれたアイスキャンデーは、大部分とけて、三分の一にも満たず、竹ばしの周囲に未練気に残っていた。母は恐縮し

ていたが、私は心から「有難うございます。」と言っていた。冷たい氷の破片が舌に快かったが、その時私は何かこみあげて来るものを感じた。私は、遠慮せずに、全部丁寧に食べてしまった。恰も、そうすることが、彼女に対する私の義務であるかのよう。それ以来、あの時のキャンデーほど、おいしいキャンデーを食べたことがない。

(三)家庭と生徒

いつものことであるが、学校での生活態度と全く違ったものを生徒にみる。無口な生徒が急に親しく語りはじめて、此方が戸惑いを感じることもある。自分の気持ちや、家庭の様子を、実にこまごまと話すのである。素行上で疑問のある生徒で、学校では頑として口を割らなかつた者が、家で一対一で話す時に、思い切ったように口に出すのである。処罰の対象になるようなことでも言う。それは、別に横着な様子で言うのではない。自分でも悩んで、どうにかしたいと思って発言するのである。この時は、生徒は、「窮鳥」となっている場合が多い。このような時の指導が最も効果があるような気がする。生徒と一緒に対策を考え、生徒の身になって悩むのである。又、学校では、ボスの存在であっても、家庭、特に母親を知っておくと、その指導に益するところがあると思う。これは何も母親に限らず、本人が尊敬している人物、あるいは信頼している人物ならば良いと思う。要は、早くその人物をつかむことである。父母の不行跡はあまりないけれども、これがある時、その生徒の指導は困難である。気持ちの良いのは、本人はもちろん、一家全員でいろいろ

ちと本人をめぐつての話を、いとも賑やかにやってくれる場合である。メモの材料も豊富である。この家庭の生徒は、大ていのびのびとしていて明朗である。反面、自由ばかり与えて、自らの指導性を捨てている両親もある。家庭ではいくら言っても駄目だから、学校で何分ともに宜しくと言ふ類である。これは率直に言つて迷惑な話である。こんな家庭の生徒に限つて、大体わがままで威張り屋で、意志が弱く、主体性に欠けるといふ共通の欠点が見られる。その他いろいろと考えさせられたが、要するに、学校だけの生徒観察は、一般に皮相に流れやすく、より正しい生徒の人間像を把握するためには、生徒が家庭の中で、どのような位置を占め、どのような生活をしていくかを知ることが大切であり、そして必要欠くべからざる条件であると信じる。学校・家庭・社会が青少年教育を目標してスクラムを組む時、初めて理想的な教育が行なわれるのである。今度の訪問でも、その必要性を再認識せられた。学習状況については、一般的には良くやっていた。勉強の姿も、勉強部屋を見て一層その実体がとらえられたような気がする。訪問した所では、資料を説明し、一応の目標をつけさせた。毎日早朝から夜まで、二泊三日の日程は、かなりきつかったが、全部終了した時のよろこびはまた大きなものがあつた。この訪問の資料を中間発表したのが、後期課外開始日の八月十五日。資料交換と反省会は九月一日に行なわれた。

つとむのことば

以上で私の極めてささやかな記録を終る。書き落したこと、必要な部分も沢山あるだろう。この論文で、私の最も強く訴えたいの

は、高校教育をゆがめる大学入試の問題を、一日も早く改善し、ということである。私達はけつして正道のみ歩いているのではないのである。地方で、生存競争に負けまいと頑張る高校。それを支えている多くの教師達。その教師達の生活は、この私のまじしい記録以上のきびしさに満ちているに違いない。入学生徒の素質・学習環境・教育施設・教員定数・給与・通学条件、等、幾多の悪条件を克服しつつ、一歩ずつ前進を続けている先輩がいる。加えて、私達は、この様な地方にも、毎日ぐんぐんと未来に伸びていくたくましい人間像を見ることができないか。彼等を見るとき、私たちに課せられた尊い使命は何であるかがわかる。彼等と共に伸びよう。そして一緒に歩こう。そして考えよう。その時も私は思うだろう。「教師になつてよかつた」と。

(前・大分県杵築高等学校教諭)
(現・大分県上野丘高等学校教諭)